

## 津和野旧藩家の琉球楽器について

比嘉悦子

(琉球大学非常勤講師)

The Uza-gaku Instruments of Tsuwano Feudal Clan, Shimane Prefecture

Etsuko HIGA

(Division of the College of Law and Letters, University of the Ryukyus)

The uza-gaku ("seated music") is a chamber orchestra of Chinese instruments and was performed at the Ryukyuan court as well as at Edo Castle when the Ryukyuan tribute mission greeted the new Shogun in Edo. The tradition of uza-gaku died after the abolition of the Ryukyuan kingdom, however, the project of restoring this music began in 1993 under the sponsorship of Okinawa's prefectural government.

The existence of two collections of uza-gaku instruments -- one in the Nagoya Tokugawa Museum and another located in the Mito Tokugawa Museum--has been known, and the collection of 20 instruments of Nagoya was brought to and exhibited in the Okinawa Prefectural Museum in November, 1993. However, there is one more set of uza-gaku instruments which was sold to the prefectural museum in 1987. This set, including 18 instruments, is said to have been kept in the Tsuwano feudal family of Shimane Prefecture. This paper examines the Tsuwano instruments in comparison with the other two collections.

### はじめに

平成4年11月に首里城が復元されて以来、首里城に関する研究がさまざまな分野で手懸けられるようになってきた。音楽を研究する者の一人として、首里城で演奏されていた三絃楽、儀礼の音楽、そして路次楽、御座樂等への興味はつきないが、平成5年度より沖

縄県観光文化局文化振興課において御座楽の復元を目指す御座楽復元研究会が設置され、その研究会の下で沖縄県立博物館所蔵の津和野旧藩家琉球楽器を調査する機会を得た。

調査は平成5年9月27日と12月6日の2回、いずれも県立博物館内において行なわれた。第1回目の9月27日は、筆者を含む御座楽復元研究会の5人のメンバーで琉球三線1丁（久場春殿型）を除く17点の中国系楽器を対象に行なった。第2回目は、沖縄県立芸術大学で催された第44回東洋音楽学会大会（12月3、4日）に出席のため来県されていた前東洋音楽学会会長で『古代シルクロードの音楽』（1982年、講談社）の著者であられる岸辺成雄氏と東洋音楽学会員数名（中国音楽研究に携わる人々）に当時県立博物館で催されていた「芸能関係資料企画展」で展示されていた10点ほどの津和野旧藩家琉球楽器（琵琶、胡弓、揚琴、七絃琴、哨吶、横笛、八角弦など）を見てもらい、それぞれの意見を出してもらうというものであった。

御座楽関係の楽器は旧琉球王家尚家には残っておらず、現在確認されているのは尾張徳川家の20点、水戸徳川家の22点、そして津和野旧藩家に伝わったといわれる県立博物館所蔵の18点のみである。しかし津和野旧藩家の琉球楽器については疑問点が残されており、このレポートでは琉球王府における中国系音楽の概要と御座楽の楽器、そして2回の調査によって得られた津和野旧藩家琉球楽器に関する見解を中間報告の形で述べてみたい。

### 琉球王府における中国系音楽

琉球王府の宮廷においては三線が保護され、冊封使節や薩摩の役人たちをもてなすための舞踊、音曲が宮廷楽として発展し今日に伝承されてきた。しかしそれ以外にも御座楽や路次楽と呼ばれる中国系の音楽が演奏されていたことはあまり知られていない。1650年、向象賢が編纂した『中山世鑑』に「洪武二十五年壬申、大明皇帝、賜閩人三十六姓、為紀綱之役。今ノ久米村ハ、其後胤也。我朝、大明ノ礼樂ヲ用ル事モ、是始」とあり、1392年（洪武25）、大明皇帝が閩人三十六姓を琉球に賜った時から、琉球王朝でも明国の礼楽が始まるとある。また『琉球国由来記』（1713年）卷四の「楽器」の項には「当國楽、察度王尚巴志王之世間、自中国伝受來乎、不可考。有座樂〈是為太平樂。奏于座中故、亦曰座樂〉、大樂、笙家來赤頭樂、路次樂等也」とあり、「琉球の国楽は、察度や尚巴志王の時代に中国から伝えられたのかどうかはっきりしないが、座樂、大樂、笙家來赤頭樂、路次樂がある」としている。国楽として座樂（=御座樂）、路次樂、そしてその他の礼楽が存在したことが伺える。大樂や笙家來赤頭樂については今だその音楽がどのようなものであったのか資料も乏しく、王朝末期まで伝承されていたのかどうかも解らない点があって、

明治生まれの古老たちの口からは聞かれることもなかった。しかし、御座楽や路次楽については山内盛彬（1890～1986）著の『琉球王朝古謡秘曲の研究』にその楽譜の断片も残っていて、廃藩置県直前まで王府で演奏されていたことが確認できる。

「路次楽」は道中樂の一種で国王の行幸や江戸下り、冊封使行列などに伴って演奏された。銅角、喇叭、哨吶、銅鑼、両班、鼓などの中国系吹奏楽器による鼓笛隊のようなもので、演奏の様子は江戸上りや冊封使行列絵巻などから伺い知ることができる。現在でも哨吶と諦め太鼓を中心とした路次楽が一部の村の民俗芸能として伝承されており、首里では阿波連本勇氏（1935年生まれ）を中心とする沖縄県民俗芸能路次楽保存会によって復元、伝承されている。

一方「御座楽」は明朝、清朝の宮廷樂に影響を受けたものと思われる中国樂器の編成による室内樂である。主に冊封使歛待の席や謝恩使、慶賀使として江戸に上った使者たちによって江戸城や薩摩屋敷で演奏された。御座楽の演目、演奏形態、樂器の種類などについては、『通航一覧』や江戸上り絵巻、その他本土側の江戸上り関係資料から得ることができるが、御座楽は路次楽と異なって、樂童子と呼ばれる身分の高い首里王府高官の子息たちによって演奏されていた。『通航一覧』による記録では、承応2年（1653）の江戸上りの時から江戸城内において御座楽が演奏されるようになり、文化3年（1806）の江戸上りまでの奏楽の次第が残されている。天保13年（1842）の江戸上りに関しては、水戸徳川家の彰考館文庫に所蔵されている『琉球人江戸着行列図』（天保13年11月8日）や岩瀬文庫蔵の『琉楽帖』に樂師、樂童子の名簿や奏楽の次第が記録されていてその年も御座楽が江戸城において演奏されたことが解るが、嘉永3年（1850）の最後の江戸上りに関する奏楽の次第の記録は今のところ見当らない。

#### 江戸上りにおける御座楽の演奏とその樂器について

『通航一覧』によると、承応2年の江戸上りの奏楽では太鼓、どら、二つかね、ひちりき（哨吶）、はんしやう（横笛）などの樂器で「太平樂」、「萬歳樂」、「難來樂」の3曲を演奏したことが記されている。また、享保3年（1718）の記録には奏楽の次第が〈樂〉、〈唱曲〉、〈琉歌〉の項目に分けられ、〈樂〉は哨吶、横笛、鼓（小銅鑼、新心）、銅鑼、三金、三板の樂器構成で「萬年春」、「賀聖明」、「樂清朝」、「鳳凰吟」、「慶皇都」の5曲が演奏されている。〈唱曲〉は歌入りの樂曲と思われるが、明曲と清曲の区別がされており、明曲として「日麗中天」、「春色嬌」、「詩歌事」、清曲として「乾道泰」と「春霞鶯」が演奏されている。〈唱曲〉の樂器編成は琵琶や胡弓、そして三弦や四弦の弦樂器に、管、三金、拍板などが加わり、弦樂器中心の音楽であったことがわかる。明曲と清曲の間には樂

器編成上の区別は明確でない。〈楽〉と〈唱曲〉に演奏される楽曲は全て中国の音曲で、それに使用された楽器も中国楽器であったことは歴然としている。しかし、最後に一曲だけ琉楽の演奏が許された。それが〈琉歌〉であるが、新井白石の『琉球来聘日記抄』による天和2年（1682）に記録された歌詞をみてみると、それが現在の「かぎやで風節（御前風節）」の歌詞と一致する。

琵琶、胡弓、月琴、揚琴、三絃、四弦、長線の弦楽器類、笛、哨吶の管楽器類、そして拍板や鼓、銅鑼などの打楽器類の20数点が一回の江戸上りに持参されたものと思われるが、それらの楽器は尚家には残っておらず、現存するのは尾張徳川家の20点、水戸徳川家の22点、そして昭和62年4月に沖縄県立博物館に移管された島根県津和野旧藩家の琉球楽器18点のみである。その中でも、寛政8年（1796）の江戸上りの時に献上されたと思われる尾張徳川家の琉球楽器20点は現在名古屋市の徳川美術館に保存されており、平成4年10月27日から12月20日まで開催された復帰20周年記念特別展「琉球王国」では県立博物館でも展示された。これらの琉球楽器については名古屋徳川美術館長であられる徳川義宣氏自身が書かれた「琉球王府式楽とその楽器について」（京都国立近代美術館編『沖縄の工芸』、1975年）や「琉球王朝とその式楽」（彦根博物館編『琉球王朝の美』、1993年）などの論文に詳しく説明されていてその全容をつかむことができる。

水戸の徳川家に保存されている琉球楽器はまだ一般展示がされていないため、楽器そのものを見る機会を得ないが、水戸徳川美術館編纂の『水戸徳川家名宝展』（1973年）に出展された尾張徳川家の琉球楽器の解説を徳川義宣氏が書いておられて、その中で尾張徳川家と水戸徳川家の琉球楽器を一点ずつ寸法を示しながら比較し、紹介されている。同解説によると、尾張家には琉球人に描かせたという奥書のある『琉球楽器図巻』があり、奏楽曲名とその構成楽器および片仮名つきの曲詞が記録されている『琉球楽演奏記録』と『御小納戸日記』があるという。また、今のところ水戸家の琉球楽器はいつの時代に水戸家へ献上されたものなのか知られていないが、水戸家の楽器には片仮名つきの名札があり、当家の『御道具御入記』にも記載されているとのことである。

### 津和野旧藩家の琉球楽器について

尾張徳川家の琉球楽器と水戸徳川家の琉球楽器に続いて出現したのが津和野旧藩家の琉球楽器である。この楽器は宮崎県の骨董品屋「志野」より持ち込まれ、県立博物館は島根県の津和野旧藩家に伝わったといわれる18点の楽器を昭和62年4月14日に購入した。当時、国際交流基金研究員として沖縄に滞在していた福建師範大学の民族音楽研究家、玉耀華氏はその当日の4月14日と4月21日の2日間でこれらの楽器を調査し、氏の著書『琉

球・中国音楽比較論』の中で詳細に報告しておられる。表1は、先述の『水戸徳川家名宝展』の解説にある尾張徳川家と水戸徳川家所蔵の琉球楽器の比較リストを参考に津和野旧藩家の琉球楽器を合わせて比較してみたものである。

表1 楽器の比較

	尾張徳川家の楽器	水戸徳川家の楽器	津和野旧藩家の楽器
I. 哨吶	長さ：45.3 口径：11.2	長さ：46.3 口径：11.2	長さ：46.0 口径：13.0
II. 鼓	台高72.7 台幅56.3 径34.0	台高72.7 台高56.3 径33.4	なし
III. 小銅鑼	径：16.0	径：22.0	なし
IV. 鍉子	総長：44.8 鐘径：10.9	総長：42.5 鐘長：9.3	なし
V. 銅鑼	台高81.1 台幅97.6 径34.5	台高81.1 台高97.6 径？	なし
VI. 三枚／三板	長さ：8.5	長さ：8.5	(拍板) 長さ：6.3
VII. 新心	直径：16.0 中径：7.0	(ロンツウ) 直径：16.8 中径：6.5	なし
VIII. 銅拍子	なし	直径：23.0 中径：13.0	なし
IX. 両班／挿板	長さ：27.5	長さ：27.5	なし
X. 橫笛	長さ：70.3	長さ：69.9	長さ：65.0
XI. 琵琶	胴棹：80.0 胴張：23.3	胴棹：82.9 胴張：28.0	胴棹：81.0 胴張：25.5(木澁あり)
XII. 揚琴	幅94.9 奥行27.3 高さ6.4 (夜雨琴)	? (破損)	(1)幅77.5 奥行28.5 高さ10.5 (2)幅68.0 奥行25.0 高さ3.5
XIII. 提箏	総長：60.0	総長：55.0	なし
XIV. 月琴	総長：83.0 胴径：40.8	総長：95.5 胴径：42.5	(1)総長：67.0 胴径：40.8 (2)総長：64.5 胴径：35.5 (3)総長：68.0 胴径：36.5 (4)総長：67.0 胴径：36.0 (5)総長：63.5 胴径：37.0
XV. 胡琴	総長：84.5	総長：78.2	なし
XVI. 二絃／二胡	総長：91.5 胴径：8.0	総長：91.5 胴径：8.9	総長：80.0 胴径：10.0(*六角胴)
XVII. 四線	総長：102.5	総長：101.0	総長：99.0 (八角絃)
XVIII. 管(堅笛)	総長：50.7	総長：51.5 (洞簫)	なし
XIX. 十二律	なし	横幅：35.2 縦：36.0 厚さ3.5	なし

XX. 長線	総長：112.5 胴径：30.0	なし	なし
XXI. 三絃	総長：101.5 棒長さ：83.2	総長：?(破損) 棒長さ：81.0	なし
XXII. 琉球三線	総長：79.5	総長：80.0 (2丁あり)	総長：79.0
XXIII. 七弦琴	なし	なし	総長：118.5
XXIV. 膜子弦	なし	なし	総長：86.0 胴径：11.0
XXV. 京胡	なし	なし	(1)総長：50.0 胴径：4.0 (2)総長：51.0 胴径：5.0

(単位はセンチメートル)

この比較表によってわからることは、尾張徳川家と水戸徳川家に献上された琉球楽器はその種類、また楽器そのものの大きさなどがよく近似しているということである。両家にはXIXとXXを除くIからXXIIまでの楽器がそれぞれに揃っており、VIIの銅拍子とXIXの十二律は尾張家には無く水戸家のみに、XXの長線は水戸家に無く尾張家のみに伝わっている。また水戸家には琉球三線が2丁も献上されている。両家に献上された琉球楽器は記録による他の江戸上り時の御座楽楽器とも対応、類似する。しかし、津和野旧藩家の琉球楽器はその楽器の種類や、大きさ(サイズ)、形の上から他の御座楽楽器の構成とは多少異っていると言わなければならない。『通航一覧』に出てくる御座楽の次第や使用された楽器の種類をみても、IからXXIIまでの楽器群は江戸上りで定例化していた御座楽の楽器といえる。

津和野旧藩家のみに伝わったとされるXXIIIの七弦琴は通常独奏楽器として演奏されることが多く、江戸上りの使者の中に七弦琴をたしなむものがいて江戸城内の奏楽とは関係なく持参したとも考えられるが、尚敬王の冊封(1719年)のために来琉した徐葆光の『中山伝言録』に「前使張学礼が命令して学ばしたという琴曲はすでに伝えられておらず、ただ琴譜のみが残っていた」ということが記載されており、その時国王は、再度那霸官毛光弼を従客の陳利衆の処に遣わして琴を習わしめ、琴を一具もらい受けている。しかしその時以来、琉球には七弦琴の伝承された記録は全くない。また津和野旧藩家の七弦琴の琴面の裏には、毛筆で〈張越製〉と製作者の名前のようなものが書かれているが、岸辺成雄氏やその他の中国音楽研究者たちの意見では、塗りの手法が比較的新しくて、清朝崩壊後に製作されたものと思われるとのことだった。

XXIVの膜子弦とXXVの京胡(2丁)も津和野旧藩家の琉球楽器だけに含まれるものであるが、これらの中国胡弓は劇音楽に用いられる楽器で、京胡は京劇の、膜子弦は台湾の歌仔戲などの主要楽器である。劇音楽の中での胡弓の使用頻度は高く、弓にまつやにを

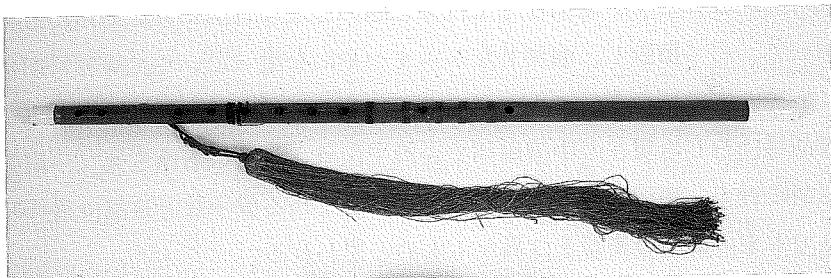
塗る時間ないということで、京胡などでは棹と胴のつなぎ目あたりにあらかじめまつやにをつけておいて、弓で擦弦し、演奏しながらまつやにを塗っていく。津和野旧藩家の京胡のひとつにも棹と胴のつなぎ目にまつやにをつけたものがあった。二絃とか二胡とよばれた御座楽の胡弓はむしろ現在の中国南部や台湾で伝承されている南音楽（＝南管楽）で使用される二胡に近く、津和野旧藩家の琉球楽器に含まれる殻子弦と京胡は後の時代に加えられたもので本来の御座楽楽器とは異なるものと思われる。

IからXXIIまでの楽器の中でも、津和野旧藩家の楽器にはIIの鼓、IIIの小銅鑼、IVの鉄子、Vの銅鑼、VIIの初心、VIIIの銅拍子、IXの両班、XIIIの提箏、XVの胡琴、XVIIの豎笛、XIXの十二律、XXIの（中国）三弦が欠如している。逆に御座楽楽器と思われるのはIの哨吶、VIの三板（拍板）、Xの横笛、XIの琵琶、XIIの揚琴、XVIの月琴（5点）、XVIIの二胡、XVIIIの四線（八角弦）、XXIIの琉球三線の9種類の楽器である。

津和野旧藩家の琉球三線はすでに久場春殿型ということがわかつっていたため、9月と12月のいずれの調査でも調査対象にはしなかったが、二回の調査を通して得られた結論を先に言うと、島根県津和野旧藩家に伝わったといわれる琉球楽器のうち、そうであるだろうと断定できるのはXの横笛とXVIIの八角弦、そして久場春殿型の琉球三線の3点だけである。

津和野旧藩家の横笛は尾張家や水戸家に伝わる横笛にくらべて少し短いが、王耀華氏によると清代の『皇朝禮器図式』に見られる仲呂笛と類似しており、氏の著書『琉球・中国音楽比較論』に示された寸法比較図を見てもほぼ同じ型の笛であることがわかる。この笛は見た目にも古い竹製の笛で、第1から第4指孔にかけて裂け目ができていて現在は使用不能である。しかし第6指孔より少し端に寄った裏側の飾孔に掛けられた朱の飾り房は、徳川家の他の楽器にもつけられた朱色の飾り房と色、材質などが酷似して琉球的である。

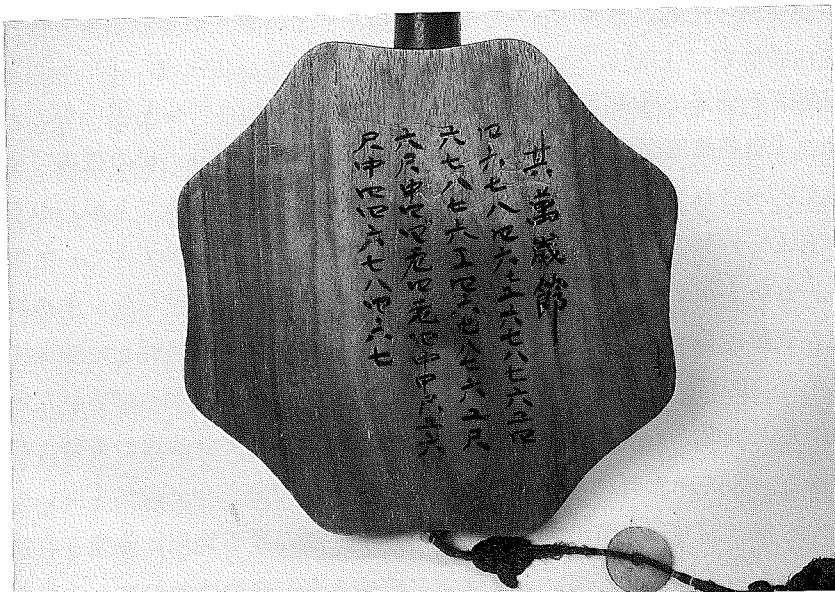
XVIIの八角琴（四線）は木肌をそのままに残した四弦楽器で、胴の部分が八角になっているところから八角琴とも呼ばれるという。王耀華氏の著書では清代の月琴に類似するということである。この津和野の八角琴は、尾張家保存の四線より全長が3センチほど短いが、構造的にも似ており、木肌の古さも感じられる。胴の最下端部に琉球王府独特の朱色の房もついている。そして胴の裏には墨字で、琉球古典音楽の楽曲のひとつである「其萬歳節」という題字と四行の工工四の楽譜が書き留められている（写真③参照）。書体も墨字も古く、少なくとも200年ほど前に琉球の使者が大和に持参した楽器であろうと思われる。



写真① 津和野旧藩家の横笛



写真② 津和野旧藩家の四線



写真③ 津和野旧藩家の四線（胴の裏面）

### その他の楽器の問題点

上で論じた七弦琴、殻子弦、京胡、横笛、八角琴、そして久場春殿型の琉球三線以外の楽器については、それらが江戸上りの琉球の使者たちが使用した楽器と断定するにはいろいろ

いろいろな問題が残る。それぞれの楽器に対する疑問点と問題点を下に記すが、今後これらの楽器に関しては明朝、清朝時代の中国楽器との照合、漆や塗り、その他の材質の専門的鑑定を待つことにしたい。現在の時点では、これらの楽器が確かに津和野旧藩家から出たものであるかないのかも調査されておらず、尾張家や水戸家に残る『楽器図鑑』や『御道具御入記』にあたいする文書も出ていない。

I. 哨吶………①材質が全体的に新しい。

②尾張家、水戸家のものに比べてラッパの口径が大きく、吹き口も新しいタイプである。

IV. 拍板………①尾張家、水戸家の三板が全く同じ長さの寸法であるのに対して、津和(三板) 野旧藩家の楽器は2センチほど短い。

②水戸家のものに関してはよくわからないが、尾張家のものは三板と呼ばれていても5枚の拍板で、金粉を塗って美しく装飾が施されている。それに対して津和野旧藩家のものは、木肌のままの3枚の拍板である。

XI. 琵琶………①寸法の比較で見る限り、水戸家の琵琶は尾張家のものより少し小さく、津和野旧藩家の琵琶は両家のものの中間に位置する。いずれも清朝時代の琵琶であることが確認される。

②しかし、津和野旧藩家の琵琶には大和の筑前琵琶などで使用する木撥がついていて、琵琶の表面の中央、絃を演奏する処にその木撥があたったと思われる傷が確認される(よく演奏されたような傷である)。尾張家の琵琶にはこのような傷は無く、演奏は指の爪でなされたようでは撥はついていない。

③胴の裏面は黒漆の上に螺鈿が施されているが、いわゆる長崎螺鈿と称されるもので、着色された貝で花と蝶が描かれている。

④背の項には、漢文の対句「一撥白雲晩・四弦黃葉秋」と書かれている。

⑤楽器を入れる袋には、表面に「鳳調龍吟 辛亥歲吟 鈍佛」とあり、裏面には「裂帛 半月文弦出蕭面安金鵝居士錄」という漢文詩が書かれている。

XII. 揚琴………①津和野旧藩家には2台の揚琴が伝えられているが、大きさは尾張徳川家のものと比べると最大幅の横幅が約20センチ前後小さい。

②津和野(2)とされた揚琴はかなり古いものだと思われ、弦も細く、切れ

ているものが多い。また演奏者の便宜のためと思われるが、琴面の2本の弦柱に添って中国の工尺譜の譜字が書かれている赤色の細い紙が張ってある。琉球人が張ったことも十分考えられるが、中国でも未熟な演奏者がよくやる習慣なので今のところ何ともいえない。

③津和野(1)の揚琴はかなり問題のある楽器で、まず、蓋の上に「涼入堂林鴻年」という金の筆文字が記されていることだ。王府時代の金文字であれば沈金か箔絵の技法に依らなければならないと思うのだが、この楽器の蓋に施された金文字は近年のエナメル性インクによる筆書きのようで、最近になってから書き加えられたものではないかと思われる。

④またこの津和野(2)の揚琴の弦はギターのスチール弦で弦の留め方も津和野(1)の古いタイプと違ってギター弦の留め方がなされている。更に、琴面中央に紅型模様の布が張られているが、材質は新しく、改竄された可能性が強い。

X IV. 月琴……①津和野旧藩家の琉球楽器には5点の月琴があくまっている。いずれも四弦五品（弦柱＝フレットが五本）で構造的には同じだが、各部位の長さには多少の差異がある。5点の月琴に施された装飾、漢詩などについては王耀華氏の『琉球・中国音楽比較論』に説明されているので、ここでは省略する。

②しかし、尾張家と水戸家の月琴が総長83.0～95.5センチなのに対し津和野の月琴はいずれも63.5～68.0と短い。よって胴径も小さく、おしなべて小振りである。特徴的なのは棹の短いことで、このようなタイプの月琴は長崎を中心に伝承されている日本の明清楽で使用されている。

X V. 二胡……①水戸家の二胡は胴径が約1センチ長いが、尾張家と水戸家の二胡は総長が全く同じでほぼ同種の楽器とみなしていいとおもう。それに対し津和野旧藩家の二胡は、総長が約10センチ短く、胴径は1～2センチ長い。

②尾張家と水戸家の楽器の胴が樽型なのに対し津和野旧藩家のものは六角形である。更に尾張家の二胡の胴面の皮は美しい金粉が塗られているので牛皮のようななめらかな皮と思われるが、津和野旧藩家のものには蛇皮がはられている。

③尾張家の二胡の棹の先端は龍頭をかたどってあり金粉が塗られてい

る。そして胴の周りは黒漆地に箔絵が施されて、弓の棹は朱色である。一方、津和野旧藩家の二胡は糸巻きと弓の棹の部分が木肌で、他の部分は黒漆が塗られていて、現代中国でよく使用されている二胡に近い。

### まとめ

以上、調査を通して津和野旧藩家の18点の楽器を尾張徳川家、水戸徳川家の琉球楽器と比較しながら点検してみたが、これらの楽器は今後更に詳しい調査や鑑定を待たなければ断定できない、問題の多い楽器であるという結論に達した。三線1丁を除く17点の中国楽器の中には、(1)果たして琉球の江戸上りの使者が実際に持つて行ったものなのかと疑問に思うもの、(2)江戸城で演奏された御座楽樂器と同種ではあっても尾張家や水戸家の樂器と同じ清朝代のものであるかどうかと思うもの、(3)年代的には清朝代であっても構造的、装飾的に多少の違いをみせるものなどがあつて一概に江戸上りの使者が津和野旧藩家に献上したものと断定するのにはあまりにも疑問な点が多すぎる。

現在の段階では、横笛と四線、そして琉球三線の3点の楽器により琉球的な要素が現われていて、この3点はおそらく琉球の使者によって大和へ持ち込まれた楽器であろうと判断する。しかし、横笛と四線に関してはさらに専門的な鑑定も必要であろう。また何故、津和野旧藩家にこのような楽器が残っていたのか、琉球の使者と津和野旧藩家の接触を裏づける歴史資料も皆無で、今後の調査・研究が待たれる状態である。

### 文献

新井白石『琉球來日記抄聘』

王耀華『琉球・中国音楽比較論』那覇出版社（1978年）

向象賢『中山世鑑』（1650年）

徐葆光『中山伝信録』（1719年）

徳川義宣「琉球王朝とその式楽」彦根博物館編『琉球王朝の美』（1993年）

徳川義宣「琉球王府式楽とその樂器について」京都国立近代美術館編『沖縄の工芸』  
(1975年)

徳川義宣「154 琉球樂器」水戸徳川博物館編『水戸徳川名宝展』（1973年）

山内盛彬『琉球王朝古謡秘曲の研究』民俗芸能全集刊行会（1964年）

『通航一覧』

『琉球國由来記』（1713年）

『琉球人江戸着行列図』（1842年）